1．弥生中期土器にみる複数の〈系〉　その2

― 大渕遺跡並行期を中心として ―

はじめに

すでに我々は、伊勢湾地方の弥生中期土器について、それが複数の〈系〉によって構成され、しかもそれぞれが独自の動きをしつつも相互作用しながら全体的な動きを形成して推移するものであるという視点を提示した（石黒　1990ａ．1990ｂ．1990ｃ）。その場合の相互作用は、いちおうは同一水準で行われるものであると考えているが、しかしそれも大渕遺跡成立以前であり、大渕遺跡成立以後の時期においてはそれぞれの〈系〉も急激な変化をきたし、その存在様態を大きく変えることになる。

こうした変化の要因には〈凹線紋系土器〉があるわけだが、〈凹線紋系土器〉に関してはこれまで余り深く議論されることはなかった。私も「外来系」としてくくるのみで、その内容にまであまり深く立ち入らなかった。阿弥陀寺遺跡報告（㈶愛知県埋蔵文化財センター1990（石黒1990ａ））では、多少見通しめいたことをしるしはしたが、あくまで課題の提示にとどまるものであった。従って、ここではすでに提示した見通しの検討をするとともに、この時期の集落および文化要素全般の動向をにらみながら〈凹線紋系土器〉を含めた複数の〈系〉に関しての具体像を結んでみたいと考える。

なお、〈系〉区分については本文での規定に準じる。

1．大渕遺跡と周辺の遺跡

大渕遺跡の北ほぼ0.5㎞には甚目寺町阿弥陀寺遺跡、北西約1.5㎞には甚目寺町森南遺跡が存在する。そして北東約５㎞には一市３町にまたがる朝日遺跡が存在する。朝日遺跡を除いては一応比較に足る資料が提示されているので、それらとの比較を行いながら当該期の様相について概観しておこう。

森南遺跡（甚目寺町教育委員会　1990）ではＳＫ５９とされた貝殻廃棄を伴う大形の土坑からまとまった一群が出土している。報告では、上層、中層、下層の３層に区分されている。このうち中層土器群は上下層をつなぐ漸移的な様相を示し、資料的な混在が認められる。従って、中層を除いて上層と下層を基準とするのが良さそうである。

下層はⅠ系の組成的な安定とⅣ系との共存状態を典型的に示し、上層はⅠ系の組成が崩壊し存在しても断片的となってⅣ系とⅢ系の共存が特徴的になるという、それぞれ大渕遺跡における１期、２期ａの特徴を共有している。ほかに参考となる遺構は若干存在するが、概ね大渕遺跡の２期ａまでおさまるようである。

阿弥陀寺遺跡では居住域を取り巻く環濠からそれぞれまとまった一群が出土している。提示されている時期区分によれば、南部地区においては内側２条の環濠出土土器群がⅠ系が組成的に安定したままⅣ系と共存する傾向を示す「Ⅲ－１期」、もっとも外側の一群は「Ⅲ－２期」、北部地区においては外側２条が「Ⅲ－１期」、居住域に内接する環濠出土

土器群がⅠ系の組成的安定からⅣ系に台付甕が成立し始める段階である「Ⅲ－１期」から「Ⅲ－２期」の資料が出土している。

そのほか、方形周溝墓溝内や住居跡廃棄、土坑などからも比較的良好な資料が得られている。ここでも、「Ⅲ－１期」ではⅠ系が組成的に安定して存在しⅣ系と共存、「Ⅲ－２期」になるとⅠ系が断片的となってⅣ系とⅢ系の共存が特徴的になるという傾向が確認できる。以上の年代を対比すると次のようになる。

中期分区[1]	森南遺跡	大渕遺跡	阿弥陀寺遺跡
４－１	ＳＫ５９下層	１期	Ⅲ－１期
４－２	ＳＫ５９上層	２期ａ	Ⅲ－２期
４－３	×	２期ｂ　△	Ⅲ－３期　△

＊　×：認められない，△：少量で不安定.

ところで阿弥陀寺遺跡で設定した「Ⅲ－３期」は上述のように大渕遺跡の２期ｂに相当した内容である。それは一応独立させてはあるものの決して安定したものでなく、遺構数・土器の出土量とも極めて少ないのである。この時期（中期４－３）は、確認できない森南遺跡は当然として大渕遺跡・阿弥陀寺遺跡を通してその不安定さは特徴的でさえある。このことが、遺跡の存続期間に関わることなのか、あるいは遺跡の遺存状況に関わることなのかは大きな問題であるけれども、私はそれを尾張地方南西部低湿地帯における集落の衰微という共通した現象と考えたい。

このように考えるのは、名古屋台地以東において上記遺跡で衰微傾向を示す時期に対応するかのように新たに遺跡の増加・定着が認められるからである。

２．大渕遺跡と東方の地域

名古屋台地では弥生時代中期を通じて遺跡分布が希薄である中で、遺跡の増加するのは中期４－１以降である〈凹線紋系土器〉展開期であり、しかもその最初期はまとまった資料が少ない。古沢町遺跡（名古屋市教育委員会　1966）などで採集されているが断片的だし、「外土居式」の標準資料も詳細は不明である。報告された遺跡資料では、例えば瑞穂遺跡（名古屋市教育委員会　1984）の住居跡は中期４－２、方形周溝墓資料は中期４－３である。

高蔵遺跡はその広い遺跡範囲の中で、環濠の一部と考えることのできそうな「Ｅ地点濠状遺構」（瓜郷遺跡調査会　1963）と呼ばれた部分の存在から比較的遡る（中期３には確実遡り、中期２まで遡る可能性がある）安定した遺跡ではないかと考えられる[2]が、こうした痕跡は少ないのが現状である。

知多半島では位置的にその付け根部分に当たる知多市細身遺跡（知多市教育委員会　1980－84）で中期４－１相当のⅠ系土器群がまとまって出土している。それに対して本来この

地域が主たる分布圏と考えられてきたⅢ系 （「獅子懸式」と呼称されている）は中期４－２相当が主であり、両者には時期差が認められる。しかも重要なのは、Ⅰ系土器群の組成的安定とともに紋様には大渕遺跡や森南遺跡では出土頻度のきわめて低い磨消線紋が認められることで、阿弥陀寺遺跡の「Ⅱ－２ｂ期」との近似性が注目されるのである。Ⅳ系の主力がどちらに対応するのか確定できないが、このことは尾張地方でのⅠ系とⅣ系の関係を考える上で示唆的であるだけなく、後述の岡島遺跡（(財）愛知県埋蔵文化財センター 1990）のあり方を考える上でも示唆的である。

矢作川下流域の西尾市岡島遺跡では弥生時代中期を通じて遺跡が形成されているが、中期４－１のまとまった資料としてはＳＤ２５出土土器群がある。ここでは、Ⅲ系は当然として、Ⅰ系とⅣ系が出土している。Ⅰ系は細頸壺・台付甕があり、細頸壺には磨消線紋が認められる。台付甕はⅠ系そのものであり、両者の存在は上述の細身遺跡を経由させると理解し易いものとなる。岡島遺跡では中期４－２になるとⅢ系甕はほとんど台付甕となるが、Ⅰ系台付甕との技術的な共通性は無い。これはⅠ系の台付甕が表現的側面にのみ影響を与えたからであろう。Ⅳ系はこの時期はまだ断片的で尾張地方とは様相が異なる。Ⅲ系は尾張地方でのⅠ系のような急激な衰退は遂げないで漸移的に変化していくようである。しかし、結局は最後に比率が逆転してⅣ系が主体を占めるようになる。

知立市天神遺跡（知立市教育委員会　1985.86）は岡島遺跡とは異なり中期４以後に形成される遺跡で、ある意味で大渕遺跡と似通った形成を見せる遺跡であるが、ここでは、近接する小針遺跡(知立市教育委員会　1976)がほぼⅢ系で占められるのとは異なり、Ⅳ系の頻度が極めて高い。Ⅳ系壺には体部が稜を持つほどに強く屈曲し外面にミガキを施すものがあり、中期４－３に相当する。組成的には安定した様相を示している。台付甕の中にはⅢ系からⅣ系への変換もあるようで相互作用は包括的変換の完了に向かっている感がある。

豊橋市橋良遺跡では住居跡と方形周溝墓が検出されている。第13号竪穴住居跡出土土器にはⅠ系台付甕のかなり変形したもの（第８回東海埋蔵文化財研究会1990『伊勢湾地方の弥生時代中期をめぐる諸問題』資料集：Ｐ105－43）があり、中期４－１のⅠ系波及から時期的に下がる資料ではないかと考えられる。おそらく遡っても中期４－２ぐらいであろう。また在来系土器と考えられるものには第１号竪穴住居跡出土土器（前掲書：Ｐ104－36・37）のようにかなり東方的な様相を見せるものがあり、炉縁石の存在とあわせて今後検討の余地を残すものである。方形周溝墓資料では、当然住居跡よりは新しく中期４－３に相当するけれども、一部には第２号方形周溝墓資料（前掲書：Ｐ103－31）のようにさらに下がるのではなとかと考えられるものもある。

中期区分	尾張南西部	名古屋台地・知多半島	三河西部	三河東部
４－１	Ⅳ系◎Ⅰ系◎	Ⅰ系◎Ⅳ系△	Ⅰ系◎Ⅳ系△	？
４－２	Ⅳ系◎Ⅲ系◎	Ⅳ系◎Ⅲ系△	Ⅳ系△Ⅲ系◎	Ⅳ系◎Ⅲ系◎
４－３	Ⅳ系△	Ⅳ系◎	Ⅳ系◎Ⅲ系△	Ⅳ系◎

3．〈凹線紋系土器〉あるいはⅣ系土器の地域差

Ⅳ系土器は上述のように広範囲に展開する。それらがすべて同一の起源を有するものでないことは改めて述べるまでもないことであるが、一応ここで整理しておこう。

この諸特徴は伊勢湾地方西岸部と東岸部、あるいは北部と南部というように大きく区分できる。

伊勢湾地方西岸部

いわゆる伊勢地方は、東岸部と極めて緊密な関係を示す四日市市周辺の北部地域平野部、ほとんどⅤ系分布圏として見なすことのできる鈴鹿市から亀山市にかけての北部地域内陸山麓部、Ⅴ系および大和地方との関係を示す津市周辺の中部地域、伊賀地方南部（名張）を経由して大和地方との緊密な関係を示す松坂市・伊勢市周辺の南部地域というように区分できる（鈴木克彦　1990：前掲書所収）。

北部地域を代表する永井遺跡（四日市市教育委員会　1972）は、ＳＸ７４・７５という方形周溝墓出土土器で、低脚台付甕の存在からおおむね中期４－２以後に位置づけられる。包含層資料では中期４－１に相当する資料も出土している。ほとんど東岸部的特徴の延長である。

中部地域・南部地域では北部地域と異なり、甕に台付甕が分布しないだけでなく、技術的にも体部内面のケズリ手法が認められない。壺の紋様構成は簾状紋など差異が目だつ。さらに南部地域になると鳥居本遺跡（前掲書　所収）のように水差し形土器が存在し、畿内地方への傾斜を強める。

このように相互に差を示す４地区に区分できるわけであるが、Ⅳ系の系譜は伊勢湾東岸部に共通する一系統、大和地方経由の一系統で整理できる。伊賀地方北部を経由しての琵琶湖地方（近江地方）南東部との関係は、Ⅴ系に関しては言えても、Ⅳ系の伝達ルートとしてそれほど太いパイプであったかどうかは今後の検討に委ねる必要がある。かつては鈴鹿峠越えルートを考えていたが、この地域を占めるⅤ系の独自性の強さは分布上の連鎖を遮断するかの感があり、中期３までは媒介的だが中期４では閉鎖的になると考えたほうがよさそうである。

伊勢湾地方東岸部

Ⅳ系の特徴はなんと言っても出現期から認められる甕の内面ケズリ手法である。これは西岸部のⅣ系と明確に区分する指標である。そして台付甕の存在。これもⅠ系台付甕からの変換として尾張地方南西部で独自に発現した個性で、中期４－２以降の東岸部Ⅳ系甕を規定する要件となる。

Ⅳ系成立期である中期４－１の形質的・表現的属性および組成の共通する地域を伊勢湾地方の外部に求めると、最も近接するのは琵琶湖地方北東部（米原町・近江町・長浜市周辺）である。〈凹線紋系土器〉が尾張地方で成立したものでは無い以上、琵琶湖地方北東部からの波及を考えるのが妥当である。伊勢湾西岸部の永井遺跡の土器群も尾張地方南西

部だけでなく琵琶湖地方北東部からの直接波及を考える必要もある。

このような伊勢湾東岸部との関連が考えられる琵琶湖地方東北部であるけれども、さらにそこへの〈凹線紋系土器〉の波及はまた如何なる経路で行われたのかという点については、また新たな課題となる。現状では内面ケズリ甕の分布など検討の余地を残すようであるが、波及経路の微細な検討は湖上交通の独自性などもあり、陸上での細かな連鎖を追及しても追いきれない可能性がある。

いずれにしても、Ⅳ系は形質的属性にしろ表現的属性にしろ属性段階での離散性はⅢ系成立期のように顕著であるから、そうした属性の統合された枠組みが構築された地域の特定を今後進めなければならない。

伊勢湾東岸部においてⅣ系は中期４－２になると、甕の体部外面に波状紋が加えられたり、また口縁部が微妙に受口状口縁を呈するものが出現する。大渕遺跡では体部外面にハケメ工具による羽状連続圧痕が施されるものも出土している。壺では、中期４－１の細頸壺口縁部外面や太頸壺口縁部内面の櫛刺突羽状紋がハケメ工具連続羽状圧痕紋となる。こうしたハケメ工具連続羽状圧痕紋は、壺に限らず高杯や台付鉢にも認められる紋様手法であり、それが単に櫛刺突羽状紋の変化したものと看ることはできない。もともと櫛描紋手法に刺突紋は存在するが、それが主要な紋様手法となることは畿内地方中心にも認められない現象である。

原体の差と時間的な隔絶さを無視するならば、刺突紋手法は前期には日本海側地方で特徴的であり、中期になると近畿地方の日本海側地方だけでなく北陸地方にも散見されるようになる。こうしてここで言うＶ系でも刺突紋は顕著である。いま、琵琶湖地方のⅣ系を眺めるとそこにおけるハケメ工具連続羽状圧痕紋の分布は北半部においてやや濃いのであり、それと甕の内面ケズリとあわせて考えるなら日本海側地方との関連が強まった結果として理解できる余地がある。

ところで、Ｖ系でも受口状口縁壺の口縁部外面の紋様としてハケメ工具連続羽状圧痕紋が認められることについては触れたけれども、これはⅣ系における様相ほど普遍性はなく受口状口縁壺に限っての部分使用であるので一応無視できると考えるが、甕体部外面の波状紋は刺突紋が加わらないとはいえ直線紋を組み合わせる例もあるので、なお属性の起源が収束するかどうか検討の余地がある。

尾張地方ではⅣ系は斉一性が高く、そこに地域差は認められない。知多半島以東への波及期においてようやく時期的な差が顕在化する。

現状では三河地方の様相が完全には明らかとなっていないけれども、岡島遺跡の土器を参考に考えてみよう。

岡島遺跡では甕はすでに台付甕となっており、時期的には中期４－３に相当すると考えられる。体部外面にはタタキ調整、内面にはケズリ調整が施され一見尾張地方のⅣ系台付甕と同じ様であるが、実際にはタタキ調整の傾きが尾張地方では左上がりであるのに対し岡島遺跡資料中には右上がりという逆方向の例があるのである。　これは中期２のⅠ系を

原型とするⅢ系の甕にも言えることであるが、なぜか鏡像のように反転するのである。技術的には同一であるが、その具体的製作工程における所作に於て異なるのである。このことはタタキ調整痕が表現的属性とはなっていなかったことを示しているのであろう。

4．Ⅱ系の消息

〈条痕紋系土器〉であるⅡ系は、中期2にⅡＳ系とⅡＮ系に分岐する。後者は以降も継続して後期まで残存するようであるが、前者は中期3以降の消息が明確となっていない。明確ではないという事実は、朝日遺跡・阿弥陀寺遺跡など尾張地方南西部の遺跡群にあってのことであり、本来の分布圏での事実ではないので、なお確定的ではない。しかし、少なくとも中期2まではその存在は明確であったから、それが不明確となることは、ⅡＳ系固有の分布圏がⅠ系との相互作用によって不安定化したか、Ⅰ系分布圏の拡大によって統合された可能性はある。特に、Ⅰ系において中期3に成立する磨消ハケメ手法が、本来Ⅰ系櫛描紋の変化系列からは生じ得ない要素であることを考えると、それがⅡＳ系から参入した要素である可能性も考慮しなければならない。つまり、研磨を加えた無紋帯がⅠ系、ⅡＳ系両者には存在するが、Ⅰ系の変化は無紋帯と櫛描紋帯の幅狭化による多重化であり、そのなかで後者が欠落して磨消線紋となるのである。これに対し磨消ハケメ帯にはそうした傾向は希薄である。多重化はほとんど認められないのである。

磨消ハケメ帯は、櫛描紋に関わると言うよりは、非櫛描紋としての性格を強く示しているのであり、それは櫛描紋系土器への傾斜が著しいⅢ系ではありえないし、Ⅰ系と分布圏の重複するⅡＳ系に起源があるとする方が納得しやすいと考える。

このようなⅡＳ系のⅠ系との融合的変化のなかで、中期4になって新たに表面化するのが、第63図に提示した土器群である。これらについては、阿弥陀寺遺跡の報告で「Ｂ系統」（ここで言うところのⅢ系）との「折衷型」としてくくった。Ⅲ系が固有の特徴をもって体系的に存在し、しかも体制化し、尾張地方南西部へも搬入品として多数流入するという状況において、上述の点とも関わってここであげた土器群にはⅢ系との共通性があるとは言えないのではないかと、思い直すに至ったからである。

686・1374・1365・1168・1のように頸部に認められる隆起とそこに施された斜格子紋やヘラ描羽状紋は、Ⅲ系で主要な紋様として使用されるのは中期2か中期4－2以降であり中期3では衰退するから、中期3での存在が一部でも認められるⅡＳ系要素の存続したものと考える方が妥当なのではないかと思うのである。

このような微細な要素への注目は、体系とは無関係な個別の要素に対する過剰な反応であるという意見があるかも知れない。しかし、個別の要素が断片化するのは分布上のまとまりがなくなって一定の組合せ（シンタクス）が崩壊したときであり、それに対しこれらは分布上も限定されまた紋様的には頸部の隆起というⅠ系固有ではない特徴とそれに組み合う紋様という一定の関係が保持されているのである。そして、特に重要視すべきはそうした特徴に関わると考えられる資料が伊勢湾西岸部でも散見されることである。

この点で第63図の１はおもしろい資料である。南部地域で出土したものであるが、①口縁部から頸部にかけては北部地域的な特徴を有し、②体部は磨消線紋が施され尾張南西部的な特徴が顕著である。そして③頸部には隆起と斜格子紋が施されている。

西岸部のⅠ系内においては③のような特徴が、決して頻度は高いわけではないがⅢ系やⅤ系にはつながらない要素として広い範囲で認められるのである。これに関しては、西岸部のそれを固有の情報保持の場があると言うことは困難であるけれども、逆に保持の場として尾張地方があると考えることはできるのであり、そこに強く表面化することはない連続した場を想定したいのである。

こうした意味で、305・664・16・210のような連弧紋も同様に重視する必要があると考えるものである。連弧紋は元々ⅡＳ系固有の紋様であり、それがⅢ系の主紋様として伝わるという経緯がある。しかし、Ⅲ系の変遷過程のなかで連弧紋は櫛描紋化していくのであり、ここで挙げたような磨消線紋風の連弧紋とはならない。磨消線紋風であることはⅠ系の磨消線紋との関わりであろうが、勝川遺跡例１６のように二枚貝刺突紋による連弧紋の存在は、それも体部上半の紋様が磨消線紋の横帯構成であることを見るなら、中期２に存在した二枚貝刺突連弧紋壺からの系譜を強く示唆しないではおかないのである。

これら紋様がただ断片として、単なる意匠の選択肢を構成するものに過ぎないのであればそれほど重要視する必要もないし、そうであれば重要視ではなく過大評価ともなる。それについては、それら資料の分布状況の重視、その紋様構成（シンタクス）へ上のパターンや系譜上の近接さなどを判断材料とするという立場によって、固有性を認めることに問題はないと考える。

今後こうした事例が着実に増加することを期待するしか現在の我々には許されていないが、Ⅱ系の固有性はそれが分岐して伝統を明確に保持するにⅡＮ系だけでなく、Ⅰ系に引き付けられていくⅡＳ系にも認めることができると考えておきたい。そして、それは中期４という時期にあって、一旦はⅠ系の枠にはめ込まれたⅡＳ系にも、それが系譜的に存続していたが故に、独自な動きを許すことになったのだと考えたい。もちろん、これらの事例はあくまで土器に限定されていることであり、それが集団の行動そのものに対応するわけではない。が、土器の日常的な使用という生活資料としての実用的機能ではなく、儀礼などのような非日常的な場における使用というような非実用的機能としての象徴的役割（伝統の持続）を認めることが可能ならばなら、という思いが強くするのである[3]。

５．中期４の社会

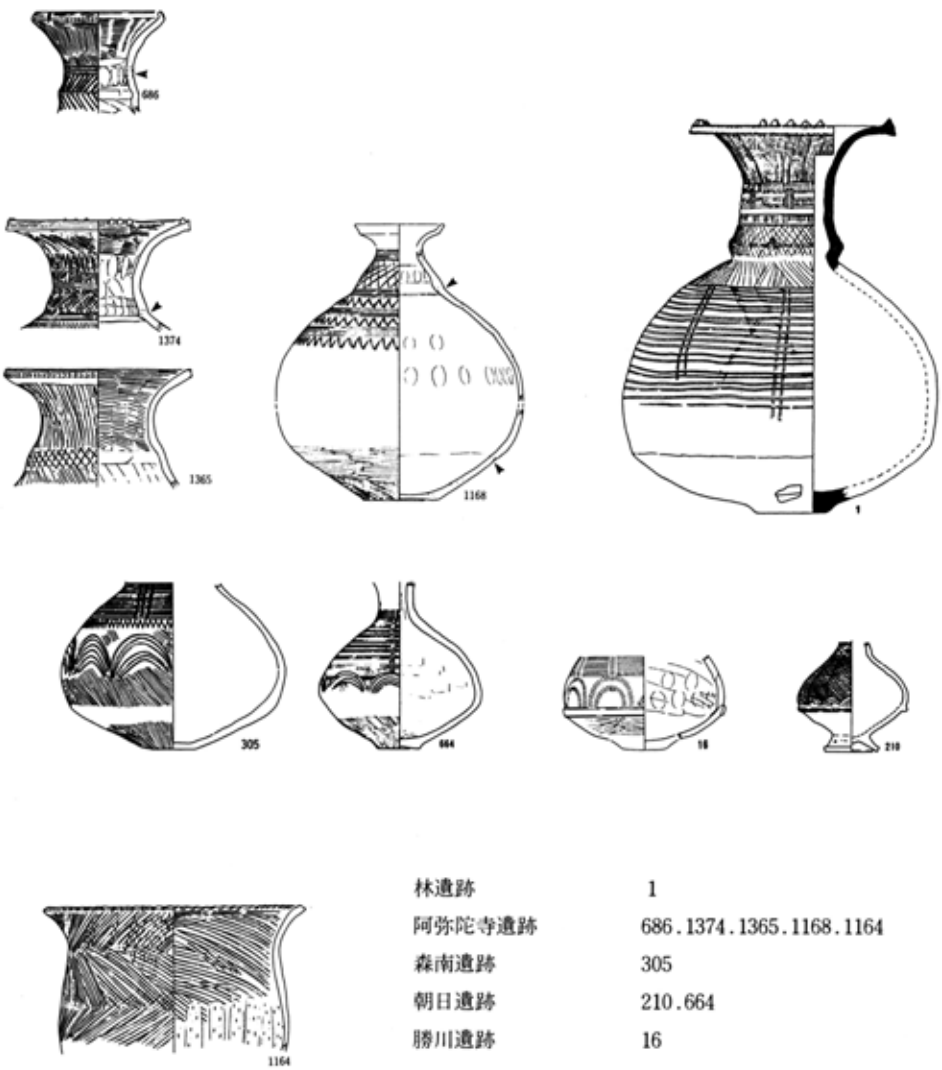
中期４は外来系としてのⅣ系と在来系としての諸系の相互関係の中で、最終的にはⅣ系主導の体制が形成されていくという、土器においてはⅠ系からⅣ系への交代の時期である。遺跡の展開に関しても、それ以前とは異なり形成・衰退が短期間で起こり極めて流動性の高いものとなっている。この高い流動性がある意味で斉一性を形成する基盤になっているともいえる。

中期４－１では大渕遺跡・阿弥陀寺遺跡・森南遺跡で見られるようにⅠ系とⅣ系との一遺跡内での共存という現象が生じる。この背景は、生産体制の共存であるのか、消費類型における共存であるのか、なお確定していないけれども、こうした共存現象はⅣ系の波及する地域では共通して観察できるのであり、ある意味で弥生時代前期の〈遠賀川系土器〉波及期とも共通するものである。

両者とも、伊勢湾地方にとって外部要素であり、異質な体系であることによって、すぐさま在地化することなく独自な系として表層的に分布圏を拡大するという現象を経過する。

このことは琵琶湖地方でも同様である。いわゆる「近江系土器」（ここで言うⅤ系に相当する）が独自性を強めるのもⅣ系の波及期で、北部と南部の地域差は別にしてこの時期には低地平野部と高地内陸部の相違も解消されるようである。

まさに、基層としての〈在来系〉と表層としての〈外来系〉であり、両者が一遺跡、一地域において二層構造を形成するのである。そして、この二層構造は相互作用における強



林遺跡	1
阿弥陀寺遺跡	686.1374.1365.1168.1164
森南遺跡	305
朝日遺跡	210.664
勝川遺跡	16

第63図　Ⅱ系土器の消息

弱の発現からみて、Ⅳ系が上位にそれ以外が下位に位置することによって、結果的にはⅣ系が全体化して以後の時代の方向を決定することになる。

ところで、このような土器に現れた変化は、社会としてはどのようであろうか。社会は基本的には不可視的な関係体であり、考古学的に把握することはきわめて難しい。遺跡配置論が社会論と同一レベルで考えられてはいるけれども、遺跡の配置が社会的に規定されたものであることを言うためには、①その配置が相互規定されたものであることを示さなければならない、②それぞれの遺跡の継続性が内的連続性を有したものであることを示さなければならない。③一定の範囲（境界）の存在が問題にされ示されなければならない。つまり、対象とする遺跡は定住集団が形成したものでなくてはならないし、そうした遺跡のネットワークが関係体の現象面の一端としての遺跡の空間的配置であることを証明しなければならない。従って、それによって描かれる得るのは定住農耕民社会であり、おそらく伊勢湾地方の一部を占めるであろう定住性の乏しい集団の社会は把握できないことになる。ということは、それによって描かれた社会は一面的であることになる。もちろん時代の主要な部分は定住農耕民社会によって形成されるであろうし、弥生時代以降の社会的趨勢が定住農耕民社会によって規定されていくことからもそれは間違った方法ではない。しかし、間違ってはいないが十分ではないのではなかろうか。列島の弥生時代以降の文化がすべてそれによって一色になるとは考えられないのである。これでは地域の個性を等閑視することになると考える。

社会を考えるについては処理すべき問題が多い中で、まず中期４の考古学的事実を整理するなら、①短期的な遺跡形成が顕著となる。②伝統的集落はその姿を変える。③Ⅳ系土器の分布圏について言えば、山間部も含めて地形環境における農耕不適地を阻害要因としないであらゆる地域に浸透する。④墓制、住居構造、石器などに大きな変化が生じる。など、画期としての様相が際だっている。①と③は構成する集団の移動性が非常に高いことを示している。あるいはⅣ系を中心としての周辺部の情報伝達が活発化すると見なすこともできる。④は伝統性の喪失、すなわち外部からの文化的圧力が強くそれによって変質させられたことを示す。この外部からの圧力とは、端的な表現が環濠の廃絶・埋没であろう。それはおそらく武力を伴うものであったろう。

このような画期的な様相の卓越する時期の社会は、まさに不安定なものであり、全体としてくくることができるようなものではないだろう。○○社会というような固有の枠を有しない、実態は個々の集落単位でまとまってしまっているようなものであると考える。その端的な表現は関東のモザイク的な囲郭集落の分布状況であろう。一旦まとまったかに見えたものではあるが、実際は外的な圧力に対して十分に求心力の働く場がなく、離散してしまったことを示すと考える。

社会とは、一定の空間的範囲において存在する集団の相互依存関係を表現する用語であるなら、中期４は以前の社会が崩壊して新しく構築されつつある時期として、新たな社会の築かれる時期、つまり変成期として把握する必要があると考える。

この変成期に、尾張地方を含めた伊勢湾地方は大きな社会的・文化的圧力をこうむり、一部は東方へと逃れ、他は新しい枠にからめとられている。新しい枠は、なお未完成であり、再度の構築を必要とするけれども、そのために固有の伝統は崩壊し、新たな容貌をみせることになるのである。　（石黒　立人）

註

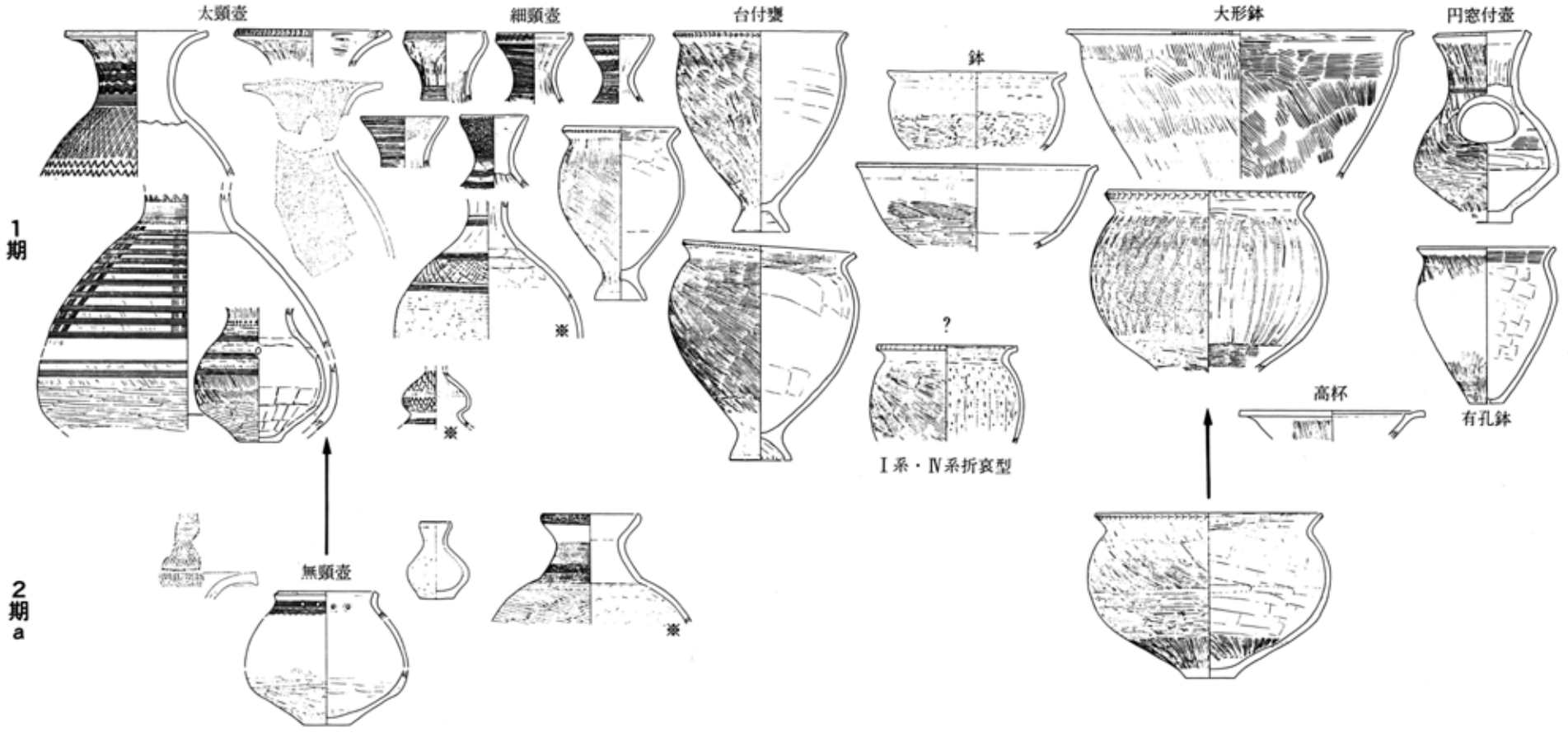
(1) 私はこれまでいくつかの時期区分表記を使用してきた。ここでの区分「中期４」は次の文献による。1986「伊勢湾周辺の弥生中期土器に関する覚書　86」『第７回　三県シンポジウム　東日本における中期後半の弥生土器』群馬県考古学談話会他。

しかし、そこでは中期４を「１段階」、「２段階」というように段階区分した。それに対してここでは、「段階」そのものの規定も問題と考え、単に序列としての１～３に改めるている。

弥生時代の時期区分ついては特に「こうあるべきだ」、「こうすべきだ」というような考えは持っていない。その時点での説明の簡便さ、対象との関係において最も適合的と思えるものであればよいと考えている。いずれにしても区分は便宜的なものである。

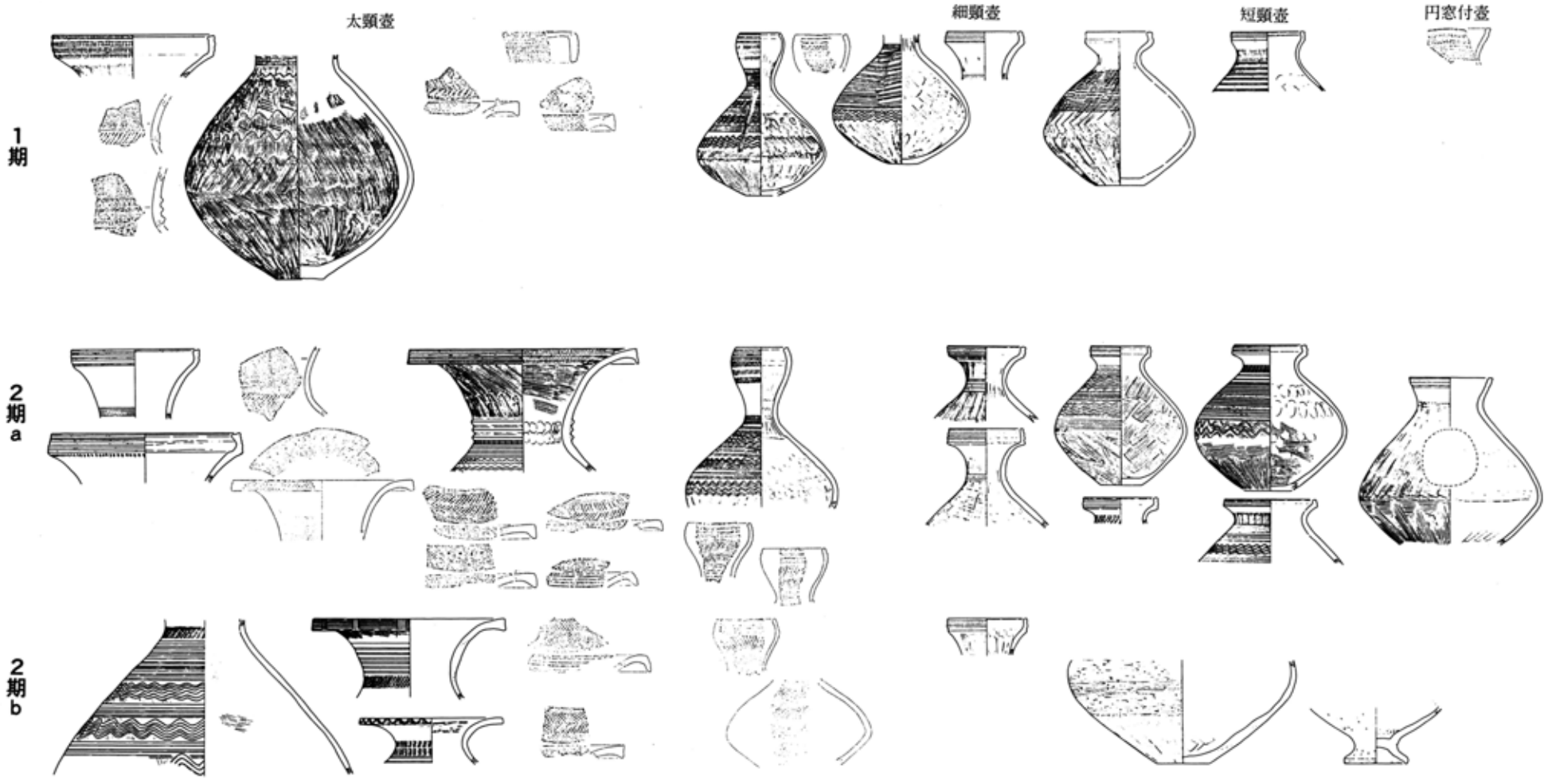
(2) 高蔵遺跡を含めて名古屋台地の諸遺跡は平野部の遺跡にも増して問題を内包している。それは、これまで調査例が少ないということではなく、地形的に余り水田可耕地が望めないと想定されるのに弥生時代前期から遺跡が形成されるという、単純な水田農耕社会一元論では理解できない側面を有するからである。その意味で、弥生時代前期ではなく、以後にも環濠集落が形成されていることが明らかとなれば、弥生社会の理解に対し寄与するところは大きいのではないかという思いがある。同様のことは知多半島に展開する諸遺跡についても言える。

(3) Ⅱ系（特にⅡＮ系）については、それがマイナーだから注視するではなく、「弥生時代とは何であるのか」という問いにおいてはメジャーな存在だからである。現状ではそれほど開発の及ばない地域、というよりそれゆえに埋蔵文化財に対する対応が遅れている地域が主要分布圏であるという現状にあって、現在把握できる資料から語り得る部分は少ない。ほとんど想像である。



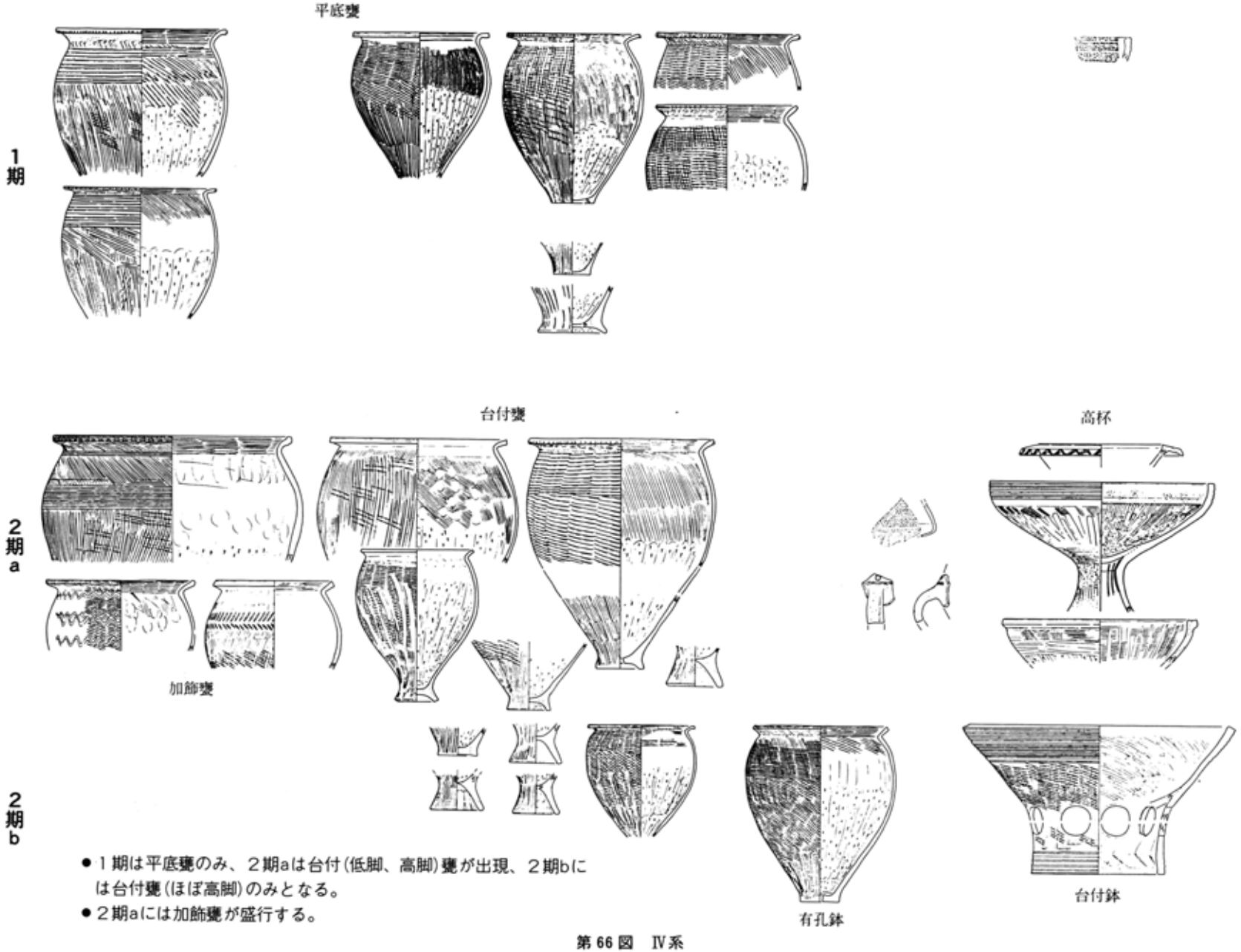
- 1期は組成が安定している。
- 2期aは断片的である。
- 2期bには存在しない。
- ※はⅡS系との関わりがあると考えられるもの。

第64図　ⅠE系



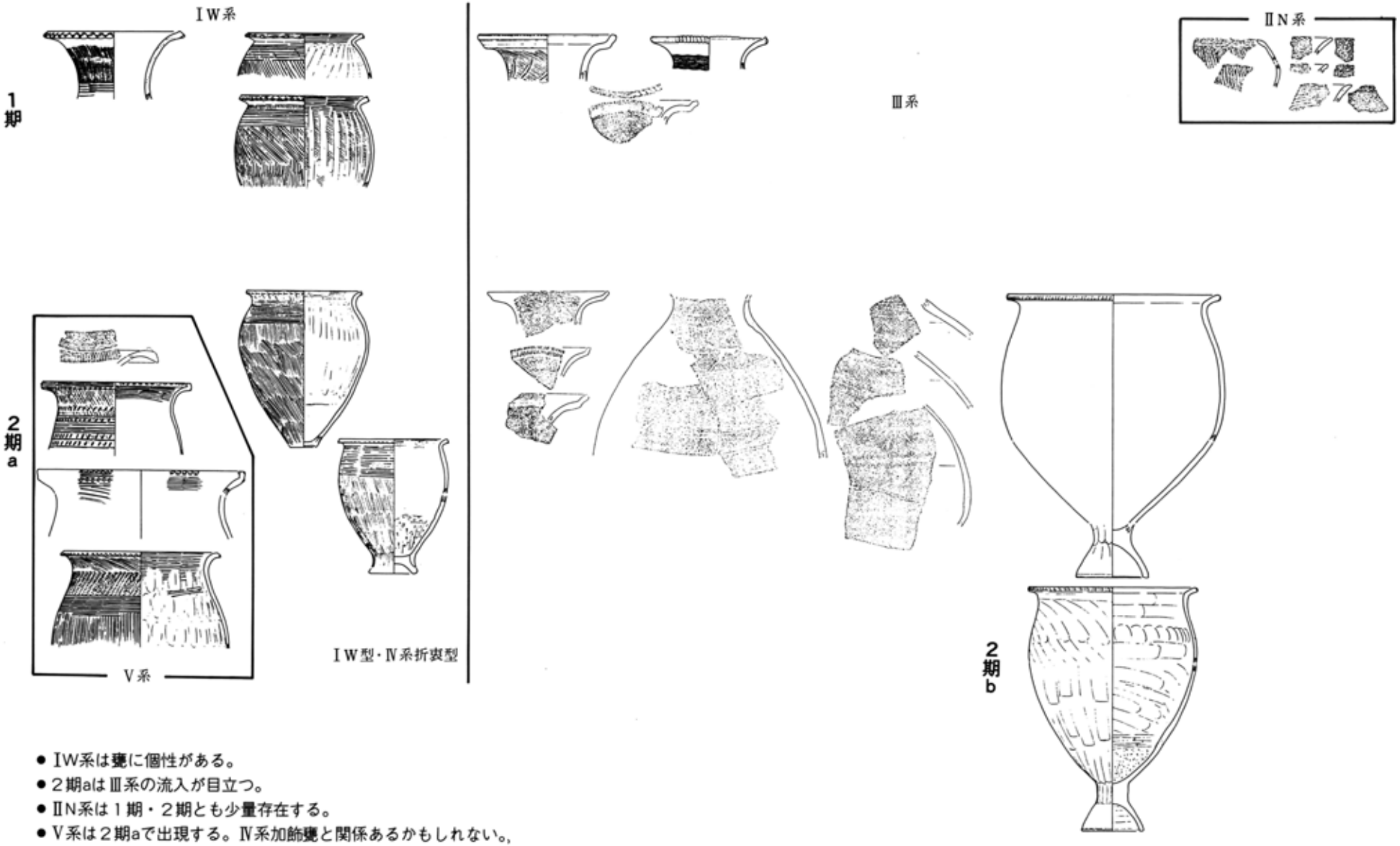
- 1期は太頸壺頸部ハケメ工具連続圧痕紋突帯・口縁部内面櫛刺突羽状紋、細頸壺口縁部櫛刺突羽状紋が特徴的。
- 2期は櫛刺突羽状紋がハケメ工具連続羽状圧痕紋に変わる。太頸壺頸部の突帯は直接施紋のハケメ工具連続圧痕紋に変わる。
- 2期bは細頸壺口縁部羽状紋が変形あるいは段数が1段となる。

第65図　Ⅳ系



● 1期は平底甕のみ、2期aは台付(低脚、高脚)甕が出現、2期bには台付甕(ほぼ高脚)のみとなる。
● 2期aには加飾甕が盛行する。

第66図　Ⅳ系



- ⅠW系は甕に個性がある。
- 2期aはⅢ系の流入が目立つ。
- ⅡN系は1期・2期とも少量存在する。
- Ⅴ系は2期aで出現する。Ⅳ系加飾甕と関係あるかもしれない。

第67図　諸系